令和六年度　中学生の「税についての作文」

沖縄国税事務所長賞　税、即ち愛

昭和薬科大学附属中学校　大澤　愛隣

「聴覚情報処理障害かも知れません」

此れが私の「障害」を知った最初の言葉だった。学校の聴力検査で要検査となり、近所の耳鼻科で検査を受けた。「聴力に異常はない」と言われ、安心したのも束の間、次には「病気でもなく障害…」と底知れぬ不安を覚えた。その後、大学病院で精密検査を受け、私は「障害者」だと確定したのである。

障害者に対し偏見を持っていた訳ではない。「そういう人もいるんだ」程度の認識の健常者が、障害者になることもあると実感した。

文字通り障害が「自分事」になった私は、関連する本を何冊も読んだ。其の中で最も印象に残ったのは、『なぜ人と人は支え合うのか（渡辺一史著）』である。此の本の第一章では、幾つかの「素朴な問い」に答えている。其の中の二つを取り上げようと思う。

一つは、「なんで税金を重くしてまで、障害者や老人を助けなくてはいけないのですか？」というもの。此れに対し、著者は「障害者や老人の存在が、逆に社会を助けている面がたくさんある」と回答する。一見健常者や若者の役に立たないと思われるような人々も、別に楽をしたくてそうあるのではなく、又全くの無価値という事はないのだ。

又二つ目には、「自然界は弱肉強食なのに、なぜ人間社会では、弱者を救おうとするのですか？」という問いが。此れには、「病者や弱者を、どうにかして助けたいと思うのは、社会的動物である人間に備わった、ある種の『自然』といえるのかもしれません」とする。此処に働いているのは、人間的、本能的な見返りを求めずに行動できる力、即ち愛である。

私は此の本を読んで、「人」という感じを思い浮かべた。「人という字は、人が互いに支え合ってできている」という金八先生の有名な台詞だ。然し此れには、「人」という漢字を作っている人達は対等ではない、長い方が短い方にキたれかかって楽をしている、という批判が付き物だ。だが私は、寧ろ人と人とはそういうものである、と考える。もたれかかる人は成る可く下の人に負担がかからぬ様配慮するし、下で支える人は嫌がるのでなく、愛によって進んでそうしている。

現代人の間に「人」を作っているのは、税金であろう。富も能力も均等でない私達が、バランスを保つために払い、分配されるもの。

障害者に対しては、特別障害者手当や特別障害給付金という制度がある。細かな違いはあれど、何方も障害者にお金を分配する為のものだ。病者や老人等にも、様々な支援形態がある。此等の財源は無論、国民全体からの税金だ。税金は即ち、愛である。愛は贈れば、必ず相手に届き、又自分に返って来る。

私は税金を納める事で、世の中を愛で満たすことが可能であると信じ、実践していく。

最後に余談。「愛隣」という私の名前は「汝自身を愛するように、汝の隣人を愛せよ」という、聖書の戒めの言葉に由来している。